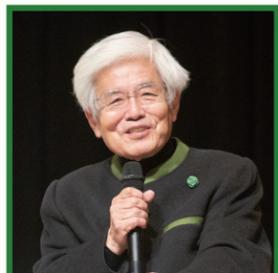


感覚として入力し、 運動として出力して 脳を活性化させる

養老 孟司 さん

感覚ではなく、
意識が優先される時代



解剖学者
養老 孟司 さん
大正大学客員教授 東京大学名誉教授
1937年神奈川県生まれ。1962年東京大学医学部卒業後、1967年同大学大学院にて医学博士号を取得。1981年同大学医学部教授。1995年に退官後、北里大学教授、大正大学客員教授、同大学地域構想研究所顧問、東京大学名誉教授。2003年『バカの壁』は、毎日出版文化賞、新語・流行語大賞を受賞。

いますけど、そうじゃないですよ。この赤ちゃんのように、日常生活のなかでひとりでに脳みそが比例という概念を持つ。その感覚を何度も繰り返すから、脳のなかにはあるルールができます。それが、学習なんです。自分でやって、その結果を受け入れて、そうしてまたやってみる。これを繰り返す。学習の根本はここにあります。それを陽明学では何と云っているか。「知行合一」です。知ることと行うことが一つになる。やっ

たこと、その結果をぐるぐる回していつて、繰り返していくことが学習です。学習というのは、皆さん一生続けていくわけですね。この「入力」と「出力」ですが、最近はお互いとも疎かになっていく気はしませんか？ たとえば、人が働くオフィスや子どもたちが過ごす学校。なんと驚くべきことに、一日中明るさが同じなんです。床も平らで硬さが同じ、風も吹きません。人工的なものの中で、入力が全然変わらないということから、学習になりません。たぶん今は子どもには「触っちゃいけない」と教えています。東京へ行ったらよくわかりますが、建物はコンクリート造りで、日陰だと冷たいし、陽が当たると火傷しそうなくらいに熱い。僕から見ると、建物自体が触ってくれるなど言っているように思えます。環境の変化を与えなければ、身体はさぼる。

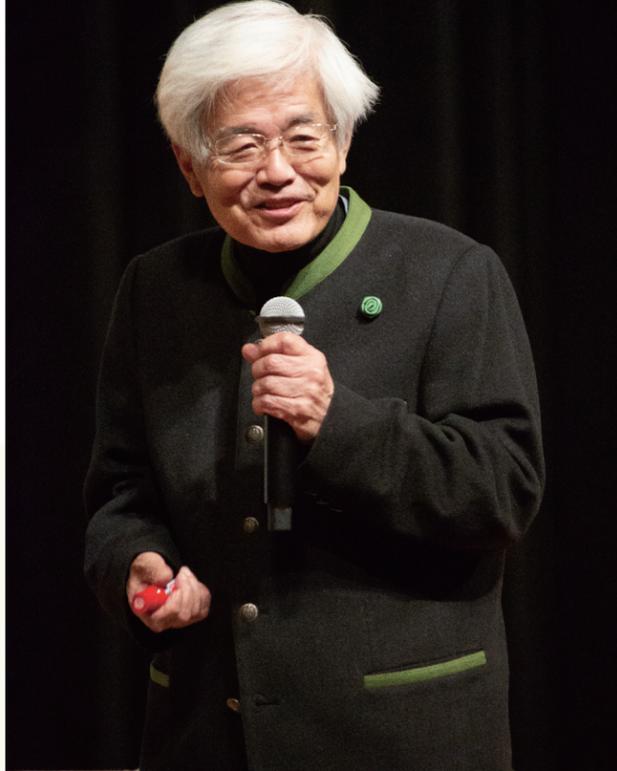
人間は上手に省略できる生き物ですから、必要でないと思えばさぼって、すぐに省略しようとしてしまいます。子どもたちの環境で、私はこのことが一番心配なんです。

東大に勤めていたときに、患者さんに言われたことがありました。ある先生に診てもらっているが、先生は人の顔も見えないし、手も触らないと。じゃあ何を見ているかというと、コンピュータなんです。つまり、データです。今から60年近く前ですけど、すでにそのころ内科の先生がコンピュータを使って診断結果を出していました。

これは、銀行での話になります。銀行へ行くと「身分証明書をもちますか？」と聞かれます。相手が私だとわかっているにもかかわらず。そうすると、私は急にならなくなる。何がわからなくなるかというと、じゃあ、ここにいるのは一体誰なんだ、と思うわけです。同じような話で、こんなこともありました。ある会社の課長さんが、「養老さん、最近の新人社員は、同じ部屋で働いているのに私に話しかけないでメールで連絡をよこすんだよ」と言っ

きました。それを聞いた途端に、私は納得しました。感覚を情報に変えてコンピュータで伝達する現代で、生身の人間は「ノイズ」になっているのだと。いま人間は、そういうふうに使われている時代なんです。

感覚がどんどん外れていって、今は脳で考える「意識」・「脳化」が優先される。じゃあ、その意識はどのくらい信用できるものですか。たとえば皆さんが眠っている間、世界はどうなっていましたか。意識がないんだから、わからない



養老孟司さんと考える これからの時代に必要な 「学び」とは？



長野県は、昨年度にスタートした総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン2.0」において、「学びの県づくり」を重点政策に掲げています。社会・経済環境が加速度的に変化し続けていく時代を心豊かに暮らしていくためには、一人ひとりが主体的に学んでいくことが大切だからです。そこで、1月に開催したフォーラムVol.1に続き、阿部守一知事が3月23日に解剖学者の養老孟司さんをゲストに迎え、岡谷市でフォーラムVol.2を開催しました。会場のカノラホールには約850名の聴衆が集まり、「学び」への理解が深まる機会となりました。

「知る」「行う」「繰り返す」が学習

養老 本日は、「学び」がテーマというお話させていただきました。学んでいくことは、どうということなのか。脳のなかの話になりますが、コンピュータのようなものだと思ってもらえればわかりやすい。脳に入ってくるのは、入力ですね。脳の働きには入力、計算、出力があり、五感を働かせて脳に情報を送り込むことにより、脳が活性化します。五感とは見る、聴く、嗅ぐ、味わう、触る。感覚というのは、外の世界とが結びついて、外から入ってきたものをガチャガチャと計算して、出力する。これをプログラムとかアルゴリズムと呼んでいるんですけど、皆さんいつの間にかそれを感覚で覚えているんですよ。

皆さんが中学のときに習った比例。たとえば、赤ちゃんがハイハイして動く、またはよちよち歩きをする。動くたび、歩くたびに見えてくるものが近づいてきたり、遠ざかったりして、大きさも違ってくるじゃないですか。だけど、もともとの物体は変わらない。これを比例といいます。皆さん比例って、学校で教わるものだと思うって

でしょう。目を覚ましたり、寝るのも意思によるものではないんです。意識というのは、実践がないんですよ。そんな実践のないものが世界を動かす権利があるんじゃないか。そこをよくお考えいただきたい。

私は、医学生には体を動かすことを中心に授業をしています。机上での講義は1年に1度くらい、ほとんどは実習室に入ってメスを握ってもらい解剖を行う。すると学生は真剣に、まじめに取り組みます。体を動かすことで感覚から入っていったら、どんどん上手になる。そして、ひとのことを本気で考えるようになります。解剖しながら、このひとの人生はどうだったのだろう、なぜ今こういう形で自分はこのひとと向き合っているのだろう……と。

学習の根本は、身体を含めた感覚と運動、それを繰り返すことです。それしかない、私は思っています。それを、日本では昔から「身につく」といっています。

【養老先生×阿部知事】 トークセッション コーディネーター 長野県参事 船木成記

養老先生のお話をうかがって、実は私も同じ経験をしたことがあります。金融機関などに行くとき身分証明書の提出を求められました(笑)。そういうデータ化、脳化が進んでいる時代に私が心配しているのは、見たくない、読みたくない、聞きたくないといった、今の自分に必要ではないと感じるものを排除する働きが出てきているのではないかとことです。

阿部 知事の言葉を受けて、私からも質問させていただきませんが、勉強に限らず、新しいものに出合

自然のなかで 子どもたちの成長を促進

阿部 長野県は今こそ健康長寿

県だといわれていますが、昔からそうだったわけではありません。食生活改善推進員の方や保健指導員の方や、いわゆる地域の健康ボランティアと呼ばれる皆さんが健康について学び、県民減塩運動などを推進して地域社会に広めていった。それが結果として健康長寿県に結びついています。まさに県民一人ひとりの力であり、長野県の大らかな誇りだと思っています。そして、こういう運動を学びと自治でも進めていきたいと考えています。

うときには何か違和感を感じることもがあると思うんですけど、その違和感に私たちはどう向き合ったらいんでしょうか？

阿部 先ほどいわれた、学校の中で、周りの環境の変化がないとひととは育たないということでしたが、これは長野県の教育の重要なテーマでもあります。県では、自然環境のなかで心身ともに健全な子どもたちを育てようという「信州やまほいく」に取り組んでいるのですが、確かに最近の子どもたちは感覚、五感に対して鈍くなってきたのではと心配しています。私は東京生まれですが、小さいときは近所に雑木林がたくさんあって、森のなかに一人であたずんでいると、子ども心に何か自然に対する畏怖を感じたものでしたが、自然に触れる機会が少なくなり、五感を使わ

なくなっているのではないかと。そんな時代に、私たちは子どもたちに対して何ができるでしょうか。

養老 これは一概にはいえないことですが、まず教育ということでは、私は小学生の頃は勉強をしないで遊んでいたいいんじゃないかという意見です。人間には適切な時期というものがある、早期教育は逆に子どもを苦しめ、その割には結果が得られない。また、今の教育は一律横並びですから、そのシステムに合う子ども、合わない子どもが出てくる。むしろ今やわせること、運動です。とにかく体づくりが第一です。大事なものは、頭の良さじゃない。頭が丈夫だということ。これは、どこにいても何が起ころうとも、的確な判断ができるということ。そして、運動の次に学業でいいんじゃないかと思えます。

一人ひとりの子どもに 向き合う柔軟な教育を

養老 私が今の日本の教育で気になるのは、少子化が起ころい、生徒の数が減少していったら、次々と学校の統廃合が進んでいることです。そして生徒は少なくなっただけで、先生は相変わらず夏休みで



自分が変わると、 世界も違って見える。 それが「学ぶ」ということ。

talk session

びの県づくりの重要なキーワードになると思っています。聴講された皆さんにとっても、今日の講演を参考に一人ひとりが自分の学びや地域の学びの取り組みに生かしていただければありがたいと思っています。養老先生、今日はお忙しいところ、どうもありがとうございます。



も忙しく、学校へ出かけて行って仕事を続けている。これって、どういうことですかね。子どもの数が減れば先生は暇になるはずであって、その分今までよりも子ども一人ひとりに余分に手をかけられるはずでしょう。そういう議論がないんですよ。私は、子どもは外でさんざん遊んでいればいいと思います。放りっぱなしで遊ばせることで、大人のプレッシャーもなくなりません。長野県の小学生たちは、6年間遊んでいるのがいいんじゃないですか(笑)。

阿部 大胆な養老先生のご意見ですが、会場の皆さんはどう思われましたか？(大拍手)

コーディネーター
船木 成記 さん
長野県参事 高知大学客員教授
1964年生まれ。(株)博報堂入社後、ソーシャルマーケティング手法によるビジネス開発業務に従事しながら、内閣府、環境省、尼崎市等の公的機関の要職を歴任。2017年より現職、長野県総合5か年計画策定に関わる。



確かに、早く勉強ができる子もいれば、スポーツが得意な子もいる。ひとによってそれぞれ違うのに、一律に同じレベルで勉強を受けさせると、できない子はそれだけで劣っていると判断されます。もう少し教育は、柔軟性が必要で、これだけ社会が変化していくなかで、教育も変えていく時代がきているのかもしれない。

「わかる」ことは 「かわる」こと

船木 養老先生の共著のなかに、「わかる」ことは「かわる」こと」という本がありますが、これは学びに近い考え方だと思いました。

養老 たとえば、重い病気にかかった人が、春になって桜を見ると、もう来年の桜は見られないかもしれないと思う。そうすると、その桜は、普段見ている桜ではなくなるんです。それは、桜が変わったのかという違う。自分が変わったんです。自分の時間がもうないかもしれない、そう考えた時に「さて、本気で生きよう」と思う。

の見え方がだいぶ変わりました。車椅子に乗っている時の目線の視界が違いましたし、ベッドに伏せている時に廊下を駆け足で走る音だけで恐怖を感じたり。普段の生活がいかに幸せかを実感し、それが人生の大きな転機にもなりました。養老先生のお話をうかがって、そのことこそ学びだったんですね。学びというのは、机に座って勉強するだけではないと、改めて考えさせられました。

自分が変わると、世界も違って見えるんです。だから、私は若い人が退屈だと言っているのを聞くと、多少腹が立つんですね。退屈だというのは、要するに世の中がずっと変わってないと思ってる。世の中は変わってないんじゃない、自分が変わってないんです。自分自身が変わってしまう、それが、学ぶということなんです。

養老 学びというのは、やめられないものなんです。本気でそれに取り組んで面白くないと感じるなら、そのほうがおかしいんです。

阿部 私もしランバレー症候群を患ったことがあり、それで世の中

阿部 学びは面白い、学びを通じて自分自身が変わっていくんだという養老先生のお話は、今後の学



本講演の動画が
YouTubeにアップ
されています。
ぜひご覧ください!

学びの県づくり
フォーラム
Vol.02